

**財団法人鍋島報效会研究助成
研究報告書 第3号**

2007年10月

財団法人鍋島報效会

目 次

第5回研究助成報告

大庭裕介「留守政府期における司法省と大蔵省の対立構造」	1
佐賀県立致遠館中学校・高等学校新聞部「[さかの水新聞]作り」	11
松本誠一「日本近代洋画における琳派の受容 一岡田三郎助の場合一」	21
報告会講評	45

佐賀新聞社取締役報道局長 寺崎宗俊

第6回研究助成報告

田中新一「売茶翁を「もっと知ろう」ーそして郷里佐賀に返そうー」	47
佐久間仁「北海道開拓に果たした佐賀藩や佐賀の人々の足跡」	79
佐賀県立佐賀商業高等学校調査部	
「県都「佐賀市」における中心商店街の発生起源と通行量調査に見る その衰退について ～歴史から活性化策を考察する～」	125
齋藤洋子「副島種臣と佐賀開進会」	143
報告会講評	159

国立科学博物館理工学研究部研究主幹 鈴木一義

留守政府期における司法省と大蔵省の対立構造

国土舘大学大学院修士課程

大庭裕介

はじめに

本稿では、明治六年政変の要因の一つとしても促えられてきた司法省と大蔵省の対立構造を再検討していく¹。

これまで、明治六年定額問題に関する研究は、井上馨の財政政策と大隈重信の財政政策との相違の有無について検討されてきた²。また、当該時期の司法省の政治的意図については、関口栄一氏が司法省は、他省に対する優越を獲得しようとしていた³と論じた以外は、総じて行政権からの司法権の独立を意図していたことで見解が一致している⁴。しかし、大蔵省の政治的意図については、関口栄一氏⁵と石井寛治氏⁶の緊縮財政政策を採っていたとする説。毛利敏彦氏の司法政策に対する反対意識とする説⁷。笠原英彦氏の緊縮財政政策を採っていた中で、政策に優先順位をつけたに過ぎないとする説⁸。高橋秀直氏の木戸派の優位を維持するための開化政策抑制を意図していたとする説⁹があり、見解の一致をみていない。

これら先学による研究の成果を踏まえた上で、本稿では司法省と大蔵省それぞれの政治的意図を明らかにすることで、留守政府期の司法省と大蔵省の対立構造を再検討していく。

岩倉使節団の派遣と大蔵省

本節では、岩倉使節団派遣後の大蔵省の政治的意図を明らかにしていく。

1871（明治4）年11月11日、右大臣岩倉具視を大使、大蔵卿大久保利通、参議木戸孝允、工部大輔伊藤博文、外務少輔山口尚芳を副使とする岩倉使節団が横浜を出発した。それに伴い、太政大臣三条実美、参議西郷隆盛らが留守政府として内政にあたることになる。岩倉使節団派遣に先立つ1871（明治4）年7月15日、廃藩置県により国内体制は、近世的な藩による割拠体制から天皇を中心とした中央集権国家体制へと転回する。これにより、藩札・藩債の処分や士族の禄制改革や廃藩置県後の地方制度改革が、明治政府の政治的課題へととなっていく。

岩倉使節団出発に際して、岩倉具視・大久保利通ら使節団と三条実美・西郷隆盛を中心とした留守政府との間で全12款からなる「約定書」¹⁰が締結される。以下、長文となるが「約定書」を引用する。

第一款 御国書并遣使ノ旨趣ヲ奉シ一致勉力シ議論矛盾目的差違ヲ生スヘカラス

第二款 中外要用ノ事件ハ其時々互ニ報告シ一月兩次ノ書信ハ必ス欠クヘカラス

「さがの水新聞」作り

佐賀県立致遠館中学校・高等学校 新聞部

1. はじめに

「致遠館」は平成15年度から公立学校では九州で初めての併設型中高一貫校となった。そのため、本校新聞部は現在、中学生3名、高校生2名の計5名が部員として活動している。主な活動内容は学校新聞である「致遠館新聞」を年2回作成し、発行することである。幸い、平成17年度は佐賀県高等学校新聞コンクールで優秀賞を受賞し、平成18年度全国総合文化祭（京都大会）に参加した。過去にもコンクールでは最優秀賞を受賞した経験を持っている。

このような活動を行う中で、部員には校内だけでなく校外に情報を発信できる新聞を作りたいという考えが生まれるようになった。そこで、今回鍋島報効会の研究助成に応募させていただき、そのきっかけをつかみたいと考えた。また、県内の高校の新聞部は、現在各校とも部員不足に悩まされている。本校新聞部の今回の活動が、県全体の高校新聞部の活性化につながることを期待している。

2. 活動の動機と目的

(1) 社会に貢献できる新聞を

新聞とは、本来社会性の強いものである。そのため、新聞を作るにあたっては、たくさんの読者が新聞記事から情報を得て、それを役立ててもらうことを目的としなければならない。すなわち、メディアとしての役割を果たす必要がある。しかしながら、本校の「致遠館新聞」は、記事に校内行事などを取り上げることが主である。確かに校内の情報源としては一役を担っているのかもしれないが、校外に開かれた紙面であるとは必ずしも言えない。ましてや、作成することに意義を求め、単なる「自己満足」に終わっている感もある。そこで、本校新聞部としては、社会的なメディアとしての役割がある新聞を以前から作りたいと考えていた。実際、全国大会に参加すると、高校生が作り上げたそのような新聞が多数出品されている。「私たちにもできるのでは。」そのような思いが、今回の取り組みを後押しした。また、このことが最終的には部員個々人の「自信」につながり、高校卒業後の人生に生きるのではとの

日本近代洋画における琳派の受容 ―岡田三郎助の場合―

佐賀県教育庁文化課

松 本 誠 一

はじめに

岡田三郎助（1869－1939）が描いた《あやめの衣》（図1）は、1927年（昭和2年）の第2回本郷絵画展⁽¹⁾に出品された。作品は、支持体としての紙に油絵の具で描かれ、櫨染調（黄金色）の均一な色調⁽²⁾を背景に、観者に背を向けた婦人を配している。美術史家森口多里は、岡田没年の翌1940年（昭和15）に『みづゑ』に掲載した「岡田三郎助の藝術の展開」のなかでこの作品に触れ、「若い婦人が金泥のバックの前に後ろ向きに立つてゐる」⁽³⁾と述べた。ここにあるように、これまで《あやめの衣》の背景は、同じ趣向の他の婦人像にみられるように金泥とされてきたが、いくぶん華やかさを抑えた、やや白っぽさも感じられる金地の絵の具については、その材質について、経年による変化を考慮に入れたにしても慎重な判断が望まれるところである。

後ろ向きの女性の肩にかかる着物は「八ツ橋模様絞友禅小袖」（図2）で、現在は京都松坂屋染色参考館に保存されている。作品の題名となっている《あやめの衣》は、生前の岡田を知る洋画家故田村一男によれば、岡田は「ころも」ではなく「きもの」と言っていたという。また、後ろ姿美人のモデルは、微かにほの見える頬のふくよかな輪郭から、現在東京国立近代美術館に所蔵されている《婦人半身像》（図3）のモデル、北村久子と同一人と思われていたが、のちに北村氏本人が《あやめの衣》のモデルであることを否定したため、この岡田の名作のモデルはわかっていない⁽⁴⁾。

1946年（昭和21）に発行された『岡田三郎助作品集』に寄せて森田龜之助は、昭和に入って描かれた《あやめの衣》を含めた一連の婦人像を、「人物と染織美とを以て装飾構図を作る」⁽⁵⁾作品のなかに位置づけた。ことに《あやめの衣》は「清艶にして、而も豪華」⁽⁶⁾と謳われたのであった。

現在、《あやめの衣》は「美人画の岡田」の代表作に数え上げられている。本論では、この岡田の婦人像の傑作について、彼の人物を描いた作品全体のなかでの位置づけを考察するとともに、とりわけ琳派の作風との関連を見ることによって、彼の画業の特質のひとつを見出そうとするものである。

プロフィールへの関心

岡田は日本近代の洋画家のなかで、「美人画家」すなわち女性像を作品の主題として描いた画家として知られている。岡田が描いた人物像の多くが女性の裸体像と着衣の婦人像であるところからそのこと

第5回研究助成報告会講評

佐賀新聞社取締役報道局長 寺崎宗俊

最近、政界などで「美しい国」や「品格」という言葉を聞きます。もとより政治や経済の基盤は文化であり、それ自体は結構なことですが、問題は「美しい」という言葉の中身です。どうすれば美しい国になれるかです。中身を伴わないアピールにはうさんくさが付きまといまいます。ただ、「美しい」ということでは佐賀も捨てたものではありません。自然、文化、歴史、伝統などなどそれこそいっぱいです。心から郷土を愛し、とことん知り尽くし、明日へとつなぐための方法はさまざまであり、鍋島報効会の研究助成の意義もそこにあります。今回の報告会に参加させていただき、こうした佐賀のありようをじっくり考える大切さをあらためて思いました。研究報告に対する感想めいたことを私なりに少しだけ述べさせてもらいます。

1. 留守政府期における司法省と大蔵省の対立構造

国土館大学大学院修士課程 大庭裕介

<評>

大庭さんの論考は岩倉使節団の留守を預かる明治政府内で表面化した司法省と大蔵省との対立構造を検討するのが主題の研究です。「明治6年の政変」のいわゆる前夜史の解明、江藤の参議辞任、下野、佐賀の乱へと展開する歴史の転回点で、新政府内部で何があったのかを丁寧に追った研究といえるでしょう。

その結論は、明治6年度の国家予算編成をめぐる新政府内部の不協和音は、これまでに指摘されたような「江藤の司法改革や開化政策などへの抑制」ではなく、「大蔵省（井上・渋沢）と江藤の間の財源をめぐる争い」だったというものです。

今日の政治で言えば、行財政改革に伴う財源をめぐる国と地方の綱引きにも似た政治局面であり、権限委譲と財源の配分をめぐる対立を想起させます。大庭さんは新たな視点で財源論に特化するアプローチを選択し、司法省と大蔵省の対立構造を浮き彫りにしてみせてくれましたが、財政問題のそれぞれの政治的立場と背景、とりわけ司法制度の確立を急ぐ江藤の思想と行動をもう少し資料的に補強していただけたらという思いが残りました。

「政治は力、力は数」という旧態依然とした政治力学の中で、水面下の生臭い闘争を繰り広げるのが政治の深層です。その重層的な構造を解明してみせるにはさらに複眼的な視点をもって今後の研究を進めていただけたらと思います。

売茶翁を「もっと知ろう」 ―そして郷里佐賀に返そう―

田 中 新 一

はじめに

わが国の茶の飲用は嵯峨天皇の時代には、もう始まっていた。当時の記録によれば、僧永忠が嵯峨天皇に「煎茶」を献じたとある。茶の飲用は遣唐使として唐に留学した僧侶によって伝えられたもので、天平元年（729）『師光年中行事』の4月8日の項に聖武天皇が宮中に100人の僧侶を召して労をねぎらい、茶を与えた「行茶の儀」、「引茶の儀」が行われた。唐の時代に中国では茶の飲用が盛んとなり、上元元年（760）頃、陸羽が『茶経』を著わした頃に、わが国でも茶を飲する習しが芽生えたと云える。こうした茶への嗜好心は奈良、平安、鎌倉の時を経て、室町の中期になって称名寺の僧侶、村田珠光（1423～1502）によって抹茶を用いた茶道への第一歩が始まる。安土桃山時代になって、対明貿易が盛んになった。堺の港が飛躍的に発展し、武家貴族に愛玩された豪華な茶の趣味が町民の会合衆へと移行し、武野紹鷗（1502～1555）によって侘びの茶の湯が形づくられた。この流れの中で、紹鷗の弟子である千宗易（1522～1591）が侘び、寂びの茶の湯を確立し、信長、秀吉の庇護のもと発展し、秀吉の後見役となり、朝廷より居士号を勅賜されて以後、千利休と名のり天下一の宗匠となった。

江戸中期に至って、茶の湯は大名の茶となり、為政者の道具として利用された。その結果、茶人の傲慢さと強い権力のもとに茶の湯の文化が横行していったといえる。この頃、洛陽の地で、茶具を担い、茶を売る僧が出現した。一見して、みすばらしい年老いた僧ではあるが何か心ひかれる知性と風貌に民衆は魅惑された。その僧は月海元昭という。11才で黄門の僧となり、諸国諸派の高僧に参じ、禅の修業を重ねる。しかし、禅の精神性を求める中で自分の無力さを感じ、又僧門の因習、墮落、妥協と譲歩、そうした教条の風を感じ、僧としての虚飾の衣を着ることができなかったのである。したがって、茶売して露命をつなぐ生活を求めたのである。人々はこの奇怪な老僧の行動が理解できず、素通りする人が多く僧月海は客のない日々が常であった。月海は、ただの茶売りではない。「売茶は兒女独夫の所業にして、世の最も賤する所なり、人の賤する所我れこれを貴しとす、即吾が吾れを快しとする所以の者なり」と『対客言志』の中に述べている。貧しい売茶の生活は苦しいものであったが、月海は「皆さん、一生貧乏な人だと笑わないで下さい。貧乏が人を苦しめるのでありません。人が勝手に貧乏に苦しんでいるのです」と云い、売茶の中に禅の精神を求め、観念主義の風潮にある仏界に行動をもって「悟」を探求しつづけたのである。ここに巷の人々は孤貧の老僧を「売茶翁」と呼ぶようになった。この売茶翁のもとに文人墨客など、多くの人が集まり始め、売茶翁を慕い、その生き方に傾倒する人が多くなった。

さて、今回の報告は売茶翁が今日まで多くの人々にいかに愛され慕われているかという事例を列記することにした。

北海道開拓に果たした佐賀藩や佐賀の人々の足跡

佐賀県武雄農林事務所

佐久間 仁

1. はじめに

幕末、薩長土を合わせたものを超える強大な軍事力を抱え、戊辰戦争では日本の将来を大きく決定づける役割を果たし、また、多くの人物を傑出してきた佐賀藩。

一方、明治二年に終結した戊辰戦争以降、佐賀出身の政府要人の下野（同六年）や佐賀戦争勃発（佐賀の乱 同七年）までの間、佐賀でどんなできごとや動きがあったのか、詳細に触れた資料は、その前後を記述した資料の数に比べると予想外に少ない。

その背景には、

- ・この時期が、版籍奉還、廃藩置県など、国内体制が大きく転換する時期であったこと
- ・佐賀藩という旧体制が曲がりなりにも明治四年七月まで存続し、その後、佐賀縣から伊万里縣、さらに佐賀縣へと、行政組織がめまぐるしく変わる過渡期であったこと
- ・明治七年に「佐賀戦争」が勃発したこと

などが少なからず影響したものと考えている。

とりわけ、戊辰戦争直後の約二年間、佐賀藩や佐賀縣・伊万里縣が関わった北海道釧路地方の開拓・支配に関して、ページを割いて詳しく触れている資料は、「鍋島直正公傳」（以下「直正公傳」という。）など一部に限られている。

このような事情があっただけで、佐賀県内に在住する方で、明治維新直後に佐賀の人々が北海道釧路地方の開拓に深く関わっていた事実をご存じの方は非常に限られている。十分な成果をあげることができなかったとされる、佐賀藩による釧路地方の支配。その一方で、当時の佐賀藩による積極的な取り組みや、その後、釧路地方に進出してきた佐賀出身者の功績を称える声は今も現地釧路地方に根強く、この関心の度合いの差は極めて大きい。

明治維新前後、佐賀が輩出した先人たちは「佐賀七賢人」をはじめ、大変よく知られているが、彼らが佐賀や東京で活躍していた同じ頃、幼な子や家族連れを交えた農民や職人たち数百人が、温暖な佐賀の地から厳寒の北海道を目指して旅だったこと、その後、彼らは歴史の波に翻弄され、その多くは佐賀への帰郷も叶わず、今も北の大地に眠っているとみられることを、多くの佐賀の人々に知っていただくことで、望郷の想いを胸にしたまま亡くなった彼らの霊の少しでも慰めになればと、その足跡を調べ、記録に残すこととした。

なお、この調査に当たっては、(財) 鍋島報效会様のご支援を頂戴した。また、北海道立文書館、北海道大学付属図書館、函館市立中央図書館、佐賀県立図書館、厚岸町海事記念館、国泰寺（厚岸

県都「佐賀市」における中心商店街の発生起源と 通行量調査に見るその衰退について

～歴史から活性化策を考察する～

佐賀県立佐賀商業高等学校調査部

1 はじめに

私たち佐賀商業高等学校調査部は、自分たちが興味を持ったことを自分たちの手で調査研究し、その調査結果を「佐賀県生徒調査研究発表会」をはじめ、機会あるごとに発表しています。

私たち調査部の活動の柱に、佐賀市中心商店街での通行量調査があります。この調査は昭和57年から現在まで続いている大変伝統のあるものです。調査方法の概要は以下の通りです。

2 佐賀市中心商店街通行量調査の概要について

①目的

佐賀市中心商店街で、各地点の通行量を調査し、過去の資料と比較することにより消費者の流れや通行量の変化をみる。また、その結果を関係機関に報告する。

②調査期間

7月 第4木曜日 ～ 日曜日までの4日間

③調査時間

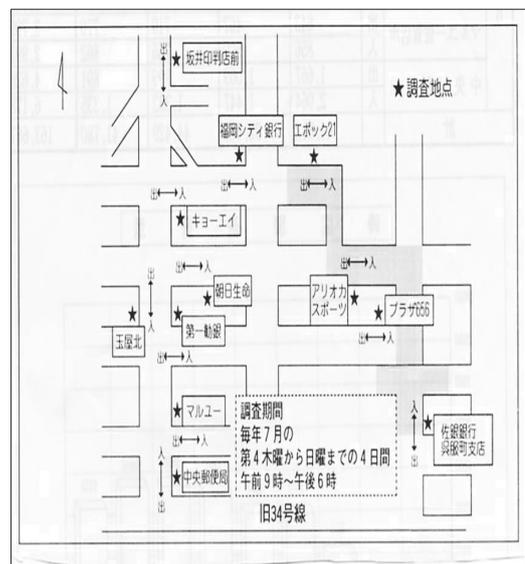
AM 9 : 00 ～ PM 6 : 00

④実施場所

JR佐賀駅から佐賀県庁までの中心商業地域12カ所。

⑤調査方法

人や自転車の流れを県庁を中心に、「入」と「出」に分類し、一時間ごとにカウントした数を集計する。



通行量の調査地点

副島種臣と佐賀開進会

早稲田大学博士後期課程

齋 藤 洋 子

はじめに

明治14年10月8日、全国各地で国会開設を求める声が高まる中、佐賀において「開進会」が誕生した。開進会は、土族反乱の系譜をひく憂国党と国権論的な共同社と米倉経夫等の民権派の三派が合体して成立した政治結社である¹。開進会を取り上げた先行研究には、杉谷昭「佐賀開進会の設立過程」²、水野公寿「九州改進黨覚え書」、「九州改進黨の結成について」がある³。杉谷氏は、会員であった山辺生芳や米倉経夫の日記等の一次史料によって開進会の実態を明らかにした。また水野氏は、九州改進黨に参加した結社の一つとして佐賀開進会を挙げ、主として新聞記事からその動向を紹介している。本稿は、こうした先行研究に依拠しつつ、以下の三点の検討を試みるものである。

第一点は、副島種臣と開進会の関係を検討することである。開進会主義書が副島の口述を筆記したものであったこと、14年秋の開拓使官有物払下げ一件に際し、副島が故郷の同志に出京を呼びかけたことは、先行研究において言及されているけれども、両者の関係がどの程度のものであったのかといった検討はなされていない。そこで改めて両者の関係を考察し、開進会における副島の影響力について考えてみたい。

第二点は、諸岡正順の人物像を明らかにすることである。諸岡は、前述した官有物払下一件に際し、副島の意向を伝えるため帰郷した人物である。諸岡については、副島の甥、娘婿であること以外は、従来ほとんど言及されることがなかった。開進会と副島の間を考えると、諸岡の果たした役割を考察することは意義のある作業ではないだろうか。

第三点は、副島と開進会の関係に対する周囲の反応を検討することである。各地で政党が結成され政治運動が激化する中で、副島と開進会の間を政府はどのように捉えていたのであろうか。両者の関係に対する当局者の反応を検証することで、同時期における副島の政治的影響力を考察したい。

以下、上記三点について順次論稿を進めていくが、本稿の目的は開進会それ自体を検討するものではないので、詳細はすべて先行研究に譲ることとし、副島との関係に絞って考察していくこととしたい。尚、引用にあたっては、旧漢字を常用漢字に改めた。又、原史料の翻刻にあたっては、適宜句読点を付した。

第6回研究助成報告会講評

国立科学博物館理工学研究部研究主幹 鈴木 一 義

今年で6回目となる鍋島報効会の一般公募研究助成報告会。実は、本助成が開始された平成13年は、私どもも、鍋島報効会に多大なご協力を得て、文部科学省特定領域研究「江戸のモノづくり」という大規模プロジェクトが始まった年でもある。平成17年に終了した「江戸のモノづくり」の目的と成果は、本助成の目的や目標とするところと一致する。「江戸のモノづくり」が平成13年に開始されて5年。日本各地で、多くの調査や研究がなされてきた。「江戸のモノづくり」では、研究者だけでなく地域の人々、例えば博物館や図書館、また郷土史に興味を持つ市民らとの連携、交流も、重要な調査方法として実践されてきた。しかし、それは言うほどたやすくはない。仕事として研究動機と研究費を持ち、能動的に動ける研究者に対して、地域の博物館や市民が同じようなレベルで活動を行うのは難しいからである。そのような中、鍋島報効会が佐賀の地において、「江戸のモノづくり」と時を同じくして本助成を開始して頂けたことは、「江戸のモノづくり」に関わった研究者にとって、極めて心強く、各地での同様の試みに、弾みをつけた。

地域にある調査されたモノ、研究されたモノは、誰のモノか。どう扱われるべきか。学術の蓄積として、知識の体系として、研究者だけがその成果を得る時代ではない。広く普遍化されることの重要性は変わらないが、そのモノを生み、残してきた地域の特殊性がさらなる重要性を持つ今日、成果は地域にこそ真っ先に活用され、地域の将来に伝え、地域の発展に供されるべきではないだろうか。地域に残されている歴史、文化、人、モノづくり……。それを意識し、調べ、活用することで、また新たな地域の文化や歴史が生まれる。第6回研究報告会を拝聞し、本助成が地域の文化や歴史に、既に大きな役割を果たしていることを実感した。研究報告された方々の年齢や職業、テーマに対する興味の持ち方などは、実に幅広く、選考や講評者には辛いかも知れないが、本助成の特徴であり、私にとっては大変刺激的であった。

1. 売茶翁を「もっと知ろう」 ―そして郷里佐賀に返そう―

田 中 新 一

<評>

ご自身が煎茶を楽しみ、その先人である佐賀出身の売茶翁に興味を持ち、調べられたもので、売茶翁ゆかりの各地を訪ねられての報告は、まだまだやることはたくさんあると、最後に楽しそうに語られていたのが印象的だった。知るということは、知りたいと思うことから始まるのが理想であろう。好きから始められた田中さんの研究は、ぜひ地域の方々や次の世代にも広げて頂きたいものである。

財団法人鍋島報効会研究助成
研究報告書 第3号

2007年10月

発行 財団法人鍋島報効会
佐賀県佐賀市松原二丁目5-22
TEL/FAX 0952-23-4200
URL:<http://www.nabeshima.or.jp>
印刷 (株)佐賀印刷社
